

令和6年度
鹿角市総合教育会議

会 議 録

令和6年11月11日

鹿 角 市
鹿角市教育委員会

令和6年度鹿角市総合教育会議を令和6年11月11日午前9時30分から鹿角市役所第1・2会議室にて開催した。

1. 出席した者の氏名は、次のとおりである。

市 長	関 厚
教 育 長	阿 部 義 弘
教育委員	田 中 喜 昭
教育委員	安 倍 良 行
教育委員	和 田 学
教育委員	吉 田 孝 子

2. 事務局職員として出席した者の氏名は、次のとおりである。

総 務 部

政策企画課長	成 田 靖 浩
同 主幹兼総合戦略室長	成 田 仁 文

健康福祉部

すこやか子育て課長兼こども家庭センター長	工 藤 千 秋
同 副主幹兼こども家庭応援班長	田 山 公 江
同 こども家庭センター主幹	櫻 田 佳 奈

教育委員会

教育部長兼国民スポーツ大会事務局長	黒 澤 香 澄
大湯ストーンサークル館長	花 海 義 人
教育次長兼総務学事課長	渡 部 裕 之
総務学事課学事指導管理監	駒ヶ嶺 充
スポーツ振興課長兼国民スポーツ大会事務局次長	相 馬 天
生涯学習課主幹兼社会教育班長	村 木 芳
総務学事課主幹兼学事指導班長	田 村 めぐみ
同 学事指導班指導主事	阿 部 博 之
同 主幹兼総務班長	大 森 美佳子

3. 協議事項

- (1) 重点的に講ずべき施策について
こども施策について

4. 傍聴人数 2人

5. 会議の概要は次のとおりである。

教育部長	皆さんお揃いになりましたので、ただいまから「令和6年度 鹿角市総合教育会議」を開会いたします。 開会にあたりまして関市長がご挨拶を申し上げます。
関市長	皆様、遅れてきまして申し訳ありませんでした。本日は、ご多用のところご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。 皆様には、鹿角市の教育行政のみならず、市政の各般にわたり、ご指導を賜っておりますことに、深く感謝申し上げます。 また、この総合教育会議は、市長部局と教育委員会が、十分な意思疎通を図り、地域の教育課題や、教育の目指すべき姿を共有しながら、様々な協議・調整ができるように進めてまいりたいと考えております。 教育委員会におきましては、学校教育や社会教育、社会体育等を担っていただいておりますが、市長部局と教育委員会が一緒になって取り組まなければならない重要な課題はもとより、市が実施している様々な施策についても、意思疎通を図るため、市と意思を共有して進めていく必要があるものと存じます。 本日のテーマは、「こども施策について」としており、市では、今年4月に「こども家庭センター」を設置し、福祉施策と教育施策の連携を図りながら、子育て環境の向上に重点的に取り組んでいるところであります。 また、担当課では、本年度に、こども計画の策定に取り組んでいるところであり、この機会を通じて、委員の皆様とテーマに沿って意見交換等をしたいと考えております。 どうか委員の皆様には、忌憚のないご意見やご提言を賜りますようお願い申し上げます。開会の挨拶とさせていただきます。
教育部長	ありがとうございました。 続きまして阿部教育長がご挨拶を申し上げます。
阿部教育長	改めましておはようございます。今、市長の挨拶でもございましたとおり、この会議は、連携を図る重要な会議と位置付けられておりますので、よろしくお願いします。また、今回はこども計画に基づいて、そしてヤングケアラー等について担当の方から説明していただきます。そうした連携を通して、子どもたちがよりよい人生を送っていただけるように私たちとしても支援してまいりたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。簡単ですけれども私からは以上でご挨拶とさせていただきます。
教育部長	ありがとうございました。 それでは協議に入りますが、ここからの進行は関市長にお願いいたします。
関市長	それでは、早速、協議に入らせていただきます。 次第の4. 協議事項の(1)重点的に講ずべき施策についてであります。本日の議題は「こども施策について」でございます。事務局より説明をお願いいたします。
すこやか子育て課こども家庭応援班長	はい。すこやか子育て課の田山です。こども施策について説明させていただきます。資料の1をご覧ください。 現在、すこやか子育て課で策定を進めているこども計画についてご説明いたします。まず、こども計画策定の背景ですが、令和5年4月1日にこどもに関する様々な取り組みを講ずるに当たっての共通の基盤として、こども施策の基本理念や基本となる事項を定めた「こども基本法」が施行され、その基本理念にのっとり、子ども施策を総合的に推進するための「こども大綱」が令和5年12月22日に閣議決定されました。このこども大綱が目指すのは、全ての子ども・若者が身体的、精神的に幸福な生活を送る事が

出来る「こどもまんなか社会」としております。それぞれの自治体がこども大綱を勘案した自治体こども計画を策定することで、こどもまんなか社会の実現につながるとしています。具体的には、生涯にわたる人格形成の基礎を築き、自立した個人として、ひとしく、健やかに成長することができ、心身の状況、置かれている環境に関わらず、その権利の擁護が図られ、将来にわたって幸せな状態で生活を送ることができる社会の実現を目指して、こども施策を総合的に推進することを目的とするもので、市町村には国もこども大綱を県のこども計画を勘案して、市町村こども計画の策定について努力義務が課せられました。

次に、秋田県のこども計画の概要ですが、県内の子ども、若者や子育て当事者の現状から、基本理念を定め、その実現に向けた5つの視点による4つの基本目標を掲げ推進していくこととしております。では、鹿角市こども計画の概要についてであります、現在、福祉行政の指針を示した「第2期鹿角市子ども・子育て支援事業計画」と、こどもの貧困対策に資する取組を示した「第2期未来へつなぐ子ども計画」を策定しておりますが、計画期間が終了することに合わせ、国がこども施策の基本理念や基本となる事項を定めた「こども基本法」と「こども大綱」の基本理念にのっとり、「第2期鹿角市子ども・子育て支援事業計画」と「第2期未来へつなぐ子ども計画」を一体的にすることに加え、若者の居場所づくりや社会参画の促進と健全育成に取り組む「こども・若者計画」を新たに包含する「こども計画」とし、計画期間を令和7年度から令和11年度までの5年間として策定いたします。

策定に向け、5つのアンケート調査を実施しております。1つ目が、保育園の入園の保護者を対象にした、子育てに関するニーズ調査。2つ目が、小学生の保護者を対象にした、子育てに関するニーズ調査。3つ目が、18歳未満の子どもがいる世帯に対する生活に関する調査。4つ目が、小学校高学年と中高生を対象にしたヤングケアラーに関する調査。5つ目が、18歳から39歳を対象にした意識行動に関する調査を実施しました。①から③のアンケート調査報告書の一部を参考資料としてお渡ししております。

次に、計画の基本理念と基本目標についてであります、現在（仮）の基本理念と基本目標として示しておりますが、子ども子育て会議の委員などの意見を伺いながら最終的に決定していくこととなります。現在の進行状況についてであります、人口推計や現計画登載の事業の検証とアンケート結果の検証を行いながら計画へ登載する事業等の検討を進めております。今回は、総合教育会議において、現在の子どもを取り巻く現状の報告とアンケート調査報告書を参考資料として提出させていただいております、今回の内容を基に少子化等に対応した施策の検討を福祉部門と教育部門が協力して進めていくことができればと思っております。

資料の2をご覧ください。鹿角市の子どもを取り巻く現状についてご報告いたします。1ページをお願いします。「人口の推移と将来推計」となります。令和2年から令和6年までの実績と令和7年から令和11年までの人口推計となります。左側が、総人口に対する0歳～39歳までの子ども、若者の割合を示したものとなり、右側がそのうちの0歳～5歳までの未就学児、6歳～11歳までの小学校の児童の推移となります。令和2年からの総人口の推移をみると、令和2年には3万188人でしたが、年々減少し、令和6年には2万7,417人と、令和2年から2,771人の減少となっております。総人口に占める若者の割合は30%以下となっており、今後も減少するものと推計しております。その中で、就学前、就学児童の割合は7%となっており、令和11年には就学前、就学児童の人数が令和2年と比較し、1,000人ほど減少し、総人口の5%ほ

どになるものと見込んでおります。

2 ページをお願いします。「出生数・合計特殊出生率の推移」となります。各年度の出生数と母親の年齢を表したものです。鹿角市で1年間に生まれた子どもの数が令和元年には152人でしたが、令和4年に100人を切り、令和5年度は95人に増加したものの、今年度の出生数の見込みは70人を下回るものと思われます。右側表が合計特殊出生率となります。国の人口動態統計によるものになりますが、鹿角市の合計特殊出生率は、平成30年から令和4年の期間は1.38となっており、県内で一番高い出生率となりました。

3 ページをお願いします。「婚姻数と婚姻率の推移」です。左の表は、秋田県全体に対する鹿角市の婚姻数と婚姻率となります。鹿角市内の婚姻数は令和元年には329件でしたが、年々ゆるやかに減少し、令和4年には283件となっております。右の表は婚姻歴のない未婚率を男女別、年齢別で表した表となります。平成12年や17年の約20年前と比較すると、未婚率は男女ともに上昇しております。特に女性は30歳代で20年前の2倍、40歳代3倍以上となっており、少子化にも影響があるものと推測されます。

なお、秋田県の婚姻率は平成12年以来、23年連続で全国最下位となっております。

4 ページをお願いします。「子どもの育ちをめぐる状況」です。左の表は令和元年度からの入園者の推移になります。定員数の多い、さくら保育園、にこにこ保育園、毛馬内保育園は減少しているもののその他の保育園については、大きな減少は見られていない状況です。右の表は、0歳～5歳の未就学児の施設等への入所状況になります。ピンク色が在宅で子育てをしている割合となりますが、毎年100人前後が在宅で子育てをしている状況ですが、保育施設への入所者はゆるやかに増加しております。

5 ページをお願いします。児童クラブの登録者の推移となります。児童数は減少しているものの、登録者は増加傾向にあり、令和6年度は児童の半数以上が児童クラブへ登録していることとなります。今回の小学生の保護者へのアンケート調査で最も多かった個別の意見では、市街地でも熊の目撃が多発しているため、学校終了後の児童クラブへの移動に不安を感じるという意見が多くありました。児童数が減少していく中で、余剰教室もでることが想定されると思いますので、学校内に児童クラブを設置することができるよう、教育委員会や学校との協議が必要になるものと考えております。

6 ページをお願いします。子育て世帯の状況ですが、左側は6歳未満と18歳未満のいる世帯とひとり親世帯の状況となります。6歳未満の子どもがいる世帯は令和元年の719世帯から令和5年には543世帯まで減少しています。18歳未満の子どもがいる世帯も減少傾向にあり、令和5年には1,781世帯となっております。ひとり親世帯も令和元年の323世帯から令和5年には269世帯に減少しております。右側の表はひとり親世帯の推移となりますが、一般世帯数は平成17年以降、減少し続けていますが、女親と子どもからなる世帯数は平成22年にかけて増加しております。その後は減少に転じ、令和2年には103世帯となっております。男親と子どもからなる世帯はわずかな増減はあるものの、15世帯前後の水準で横ばいに推移しております。

7 ページをお願いします。ひとり親世帯へ支給する児童扶養手当と、20歳未満の障害を持つ児童を養育する世帯へ支給する特別児童扶養手当の受給者となりますが、どちらも減少傾向となっております。右側は就学援助の認定者数となりますが、認定者、認定率とも減少してきております。

8 ページをお願いします。学校別の児童生徒数と学級数の推移となります。平成27

	年度から令和6年度までの実績で、左上段が小学校、下段が中学校となります。平成27年度から令和6年度までの9年間で、小学校は412人、中学校は174人の減少となっており、小中学校合わせると、586人、約26.0%の減少となっております。平成27年度から平成30年度では177人の減少、平成30年度から令和3年度では136人の減少、令和3年度から令和6年度では273人減少しており、直近の減少率が大きくなっており、少子化が一層進んでいることがうかがえます。 9ページをお願いします。児童相談所等の相談件数となります。県の児童相談所のうち鹿角市も含む北児童相談所の相談件数となります。右は鹿角市の家庭相談員への相談件数となります。いずれも児童虐待に関する相談が多くなっており、次いで、こどもの障害や行動、性格に関する育成相談が多くなっております。市では、今年度より、すこやか子育て課内に「こども家庭センター」を設置し、特定妊婦や要支援児童への対応のほか、虐待予防のため、個々の家庭に応じた切れ目ない支援ができるよう相談支援体制を強化しております。資料の2についての説明は以上となります。
すこやか子育て課こども家庭センター主幹	こども家庭センターの櫻田です。私からは資料3の「ヤングケアラーの把握について」説明いたします。 国では、子ども・若者育成支援推進法及び児童福祉法第25条の2について、本年6月に改正し、ヤングケアラー支援の一層の強化を図っております。これを受け、こども家庭センターでは、ヤングケアラーに関するアンケートを市内の児童生徒を対象に実施することといたしました。目的は、資料の①から③に書かれているとおりとなります。調査概要ですが、対象は、市内の小学校、中学校、高校に在籍する児童生徒です。調査方法は、学校タブレットによるWEBアンケートで実施しております。調査結果は、有効回答1,406人で82.8%の回答率でした。 次に、調査結果概要についてですが、(1)「ヤングケアラー」という言葉を知っていましたか」については、「知っていた」と答えた割合は全体の36%、「知らなかった」は全体の64%でした。学校があがるにつれ、「ヤングケアラー」の認知は高くなっています。(2)「あなたが「お世話」をしている家族はいますか」については、「いる」と答えた人は、全体の4%にあたる52人いました。(3)「あなたが「お世話」している人は誰ですか」については、「きょうだい」が多くなっています。この中で、父母と答えている場合は、負担が大きい場合が考えられるので、ケアの内容等について詳しく確認していく必要があると思われます。 裏面をご覧ください。2. 支援の特徴についてですが、ヤングケアラーといわれる状態で留意が必要なのは、ケアを担うことにより、本来守られるべき子ども自身の権利が侵害されている状況にないかということです。家族のケアが必要な場合は、様々な課題が関係し合い、複合化しやすく、家族の状況に応じた支援の組み合わせを考えていく必要があります。また、ケアを担うことが日常的になっていると、うまく周りを頼れずに課題を抱え込んでしまうことがあるとされています。 3. 今後の対応についてですが、アンケート調査により把握したヤングケアラーの情報について、教育委員会、学校、こども家庭センターが適切に情報共有し、支援に繋がっていきたいと思います。支援の必要性や緊急性の高い場合は、個別に介入し、関係機関と連携して支援に繋がってまいります。また、ヤングケアラーの支援を進めていくためには、ヤングケアラーへの理解や気づきに繋がる普及啓発を継続的に実施していきたいと思います。 以上で説明を終わります。

関市長	どうもありがとうございました。ただいま2つの説明がありましたが、委員の皆様方からご意見ご質問等がございましたらご発言をお願いいたします。 はい、田中委員、どうぞ。
田中教育委員	はい。今日のお話の中心がこども施策についてでありますので、私の感じたことを述べさせていただきたいと思います。まず、先ほど説明いただいた様々なアンケートですとか、少子化の現状について、政府が示したこどもまんなか社会ということについて深く考えたことがあります。今の現状、解決すべき課題がたくさんありますけれども、きっとこれが1丁目1番地の一番優先すべき課題ではないかと感じております。経済や自然環境は勿論でありますけれども、子どもたちの在り方、これからの社会を作ること、とても大事なものはこの一点にかかっているのではないかと思います。先ほど説明いただいたこども計画について、その場にいる機会もありましたので、いろいろなアンケートも聞きました。その結果、様々な課題、様々な現状を突き付けられていると感じています。何よりもショッキングだったのは、今年の出生数が70人を下回るという、この数字は私にとってとてもショックでした。1年間に産まれる子どもの数が70人を下回るということは、これから上がる要素があるのかも知れませんが、これが下回った場合、学校は1校でよくなるのではないかという端的な思いもありますし、町に子どもがいなくなるのではないかという現実が突き付けられました。先般、本市に視察依頼が来まして私がお話をする機会がありましたので、本市を紹介するために調べましたところ、少子高齢化が進んでいるなどはイメージしていましたが、65歳までの生産年齢人口が抱える高齢者の数は1.2人を1人で支えなければならないと、ここまで来たかと実感しました。高齢化が悪いわけではないのですが、それを支える子どもたちを含め若い年齢層がいらないという地域の現状をどう捉えるのか様々な意見があるかと思います。先般、こども計画に関わる調査結果を聞きまして思ったことは、このアンケートからいろいろなことが読み取れるわけですが、子どもが産まれない一番の理由は、小児医療の少なさですとか、結婚に対する意識の低さといいいましょく意識の変化といいいましょく、そういったところが結婚をする男女が少なくなり子どもが産まなくなり、そして子どもたちを育てにくい環境になっているのではないかと思います。そういったことを捉えて、教育というところでは勿論議論すべきでありますけれども、様々な人が様々なところでこの少子化、高齢化について、そして、子どもたちの在り方について議論すべきであると感じたところであります。差し当たりまして、こども計画策定の様々な調査結果から得たニーズを反映するものであると思いますけれども、私の思うところは、まずは子どもたちが生活しやすいような生活基盤、もちろん労働環境もありますし、若い親たちが経済的な負担を感じる、そういったところも改善が必要だということも十分承知の上で、子どもたちが生活しやすいこの鹿角を作って、産まれる子どもたちを大事に見守って、教育というところで力をつけていっていただくということが重要ではないかと考えております。今日のテーマはとても広くて教育というところでは切り離せないテーマでありますし、様々な行政サービス、そして地域の認識、意識の変革も求められると思います。非常に大雑把な意見ですが、教育というだけではなくて生活そもそもの基盤も含めて議論するべきではないかと思っておりますので、今年70人しか産まれない子どもたち、そして来年は何人産まれるかわかりませんが、たくさんの子もたちがあふれる鹿角になるように、大人が議論すべきではないかと思っております。今日のテーマは大変ありがたいなと思っておりますし、まず最初に私の思いを述べさせていただきます。

関市長	今のご発言をいただきまして、私の方から。 子どもの数が70人を割るということで、私は市長になる前に花輪高校の同窓会の仕事をしておりましたが、なんとか3校残してもらえないかとお願いしたのですが、秋田県全体の人口推移、それから鹿角市の人口推移を見ますと、鹿角地域に1校設置することも難しい状況下で、なんとか生徒を確保していくことも課題に挙げられて最終的に3校が1校になるということでもあります。しかも、そのうちの統合した鹿角高校についても、維持していくことにいろいろな課題がありまして、県教育長の方にもお願いしながら、鹿角高校の校長にもお願いしながらやってきましたけれども、田中委員がおっしゃっており、それ以上にそもそも子どもの出生数が減少しているということが高校まで影響しているということがありまして、10年経てばどうなるかということが予測できる段階になっております。鹿角市の人口に関する社会増については、2月に20人、8月には21人の増となったこともあったのですが、次の月にはまた減少してしまいます。人口をどう増やすかという問題と子どもの出生数をどう増やすかということは非常に密接に関係しておりますので、そこにきちんと対応していかなければならないと思っております。特に、私の公約の中に「産婦人科の復活」ということがありまして、3年間東京の大学または関係する医療機関、医療大学等の医局などいろいろな団体への働きかけをしながら進めておりますが、やはりそれぞれのハードルが大変高く、実現していないところはお詫びを申し上げたいと思います。その中で、明後日、秋田選出の国会議員の皆さんと県知事、市長等の打合せがあります。昨年の打合せの中では、小規模保育園等を造りながら地域の人口の基礎である子どもを育てる環境を維持していくということが由利本荘市長から提案されて、小規模保育園や家庭内保育園という制度を充実させるという重要な議論がありました。また、もう一つ東北市長会では、公立病院の維持という点も議論されましたが、厚生病院の充実ということが項目の中に入っていないということで新たにそれも入れていただくようお願いしております。今お話ししました、病院、教育、就職のチャンスを増やしていくという3つの点は非常に不可分な関係でありますし、市として、それ以外にも建設関連事業を増やしていくという形で雇用を増やしていくという点も密接に関係していると思っております。もう一つ、こどもの数については、コロナにより、この4年間大変厳しい状況に置かれていたことも背景にあって、秋田県が全国で一番人口減少率が高いということで、県もそれに対する対策もしておりますけれども追いついていないということで、知事の方からも取り組みの強化を求められているところであります。本日のテーマである、子どもに関する対策については、この会議でもいろいろご提案をいただきながらそれを取り入れていくことが大事ではないかと思っております。 他にご意見ございますか。
阿部教育長	私の方からは教育環境という面でお話したいと思います。田中委員がおっしゃったように、子育て世代の方々に、鹿角市は子育てしやすく、教育環境が充実しているというプラスのイメージを持っていただくことによって、もしかすると移住者も増えてくれるのかも知れませんが、Uターンする人も増えてくるかも知れない。それが徐々に人口減の歯止めとなって活力にもつながるというふうに考えておりますので、教育委員会としては清潔で安全安心な教育環境を維持、整備していくために必要な予算を計上していくよう努力してまいりたいと思っております。そして、現在各学校で取り組んでいる教科の教育活動の充実は勿論のことですが、ふるさと教育等の教育活動を通じて、子どもたちが自分の学校や住んでいる地域に誇りを持っていただくという取り組みを先生たちは

	一生懸命取り組んでくれています。土曜日の花輪小学校の１５０周年記念式典においても、６年生が中心に、１５０年の歴史を振り返りながら学校の特徴を劇仕立てで教えてくれて、その中で、最後の言葉として、誇りを持っている、愛着を感じている、これからも花輪小学校に活躍し続けてもらいたいという願いをお話していました。先日の尾去沢小学校の１５０周年式典でも、はちまんたい教育の日でも、子どもたちの発表の機会を見させていただきまして、自分の学校とか自分の地域に誇りを持っている様子が伺えております。こういったことを継続して充実させていくことが我々の取り組みで、その先に魅力ある学校が作られて行ってそれが地域の皆様、地域以外の皆様にも伝わることによって子育てしやすい環境、教育が充実している環境ということをアピールできるのではないかと考えておりますので、引き続き、皆さんと協力しながら学校と手を携えて取り組んでいきたいと考えております。
関市長	あと、先ほどの市の社会増に若干追加しますが、２月や８月に２０人ほど人口が増えたということはこれまでになかった画期的なことなのですが、それはやはり地熱を含めた仕事がありまして増えたということです。私もびっくりしたのですが、秋田県内で社会増となっているのは、秋田市の１５１人で、次は鹿角市の２１人です。県内２５市町村ありますが、秋田市の次が鹿角市でした。その理由についていろいろな分析はありますが、観光の関係で増えたのではないかと考えています。あともう一つは、建設事業で東北自動車道の大修理、河川の改修、災害復旧等で８月以降宿泊施設がほぼ満室になっています。特に、台湾から観光客がきりたんぽの手作りコーナーに１年間で２万５千人来ています。コロナ前はほぼゼロでしたがこれが２万５千人に増えたということで、こういうところが定着してくれば鹿角市全体の社会増というところがもう少し改善してくるのかなと思います。秋田県全般非常に厳しい状況でありまして、私も各市町村長さんとお話するのですが、やはりどこも人口の確保、減少をセーブすることがそれぞれ市政、町政、村政の第一テーマであるということです。現時点では、そういう形で人口を増やすというところに力を入れながら、やはり医療関係の改善もしていかなければならないと考えています。 他にご意見などはございますでしょうか。
田中教育委員	もう１点だけ。ただいま、市長と教育長から、先が明るくなるようなとても素晴らしいお話を聞いて、少し安心しているところがありますけれども、まさに生活の基盤と医療の充実と雇用、働く場の確保と、関係人口が増えるということは大変ありがたいことです。うれしいことだと思っています。もう１点、アンケート調査の結果で、未就学児童を持つ親御さん、そして１８歳未満の子どもを持つ親御さんたちの意見を聞きますと、今言った生活基盤ですとか医療の充実ですとか経済基盤の確保ということは勿論高いのですが、その次に高かったのが安全安心な遊ぶ場、いわゆる子育ての環境の安全安心の場を求めておりましたし、先ほどの説明にもありました児童クラブの在り方について、もう少し充実を図っていただきたいという意見もありました。この２つはとても重要だと思っております。本市においては、アルパスにあります遊具ですとか、いろいろな公園ですとか遊ぶ場が充実しているかだと思います。勿論、自然環境豊かな場ですので様々なフィールドがありますし、充実しているのだと思いますが、どうやら今の若い方が求めているのはそういうアウトドアではなくて、室内で子どもたちが安全安心に遊ぶ、育てる場が求められているのではないかと感じています。コモッセの児童センターではたくさんの遊具があって室内で安全安心に遊ばせる場がありますが、うちの孫が来るとそこに入り浸りで朝から夕方まで遊んでおります。そういった室内で遊ぶ場をもう少し

	増やすというのも、子どもたちが安全安心に生活できる、そしてこれから増えていくというのが1点と、学校と児童クラブのすみ分けは勿論十分承知の上ですけれども、もう少し垣根を下げて学校施設をうまく使いながら、私も施設にお邪魔して現状を見たときに、学校からさよならと言って出て、同じ校舎の違う玄関から児童クラブへ入るという学校もありましたし、時にはシャッターで閉じて学校施設と児童クラブを分けていると。勿論管理する部署が違うのだとは思いますが、そこも含めて、先ほど熊という話もありましたけれども、そればかりではなく、共働きの親御さんたちが求めている放課後の居場所づくりということもあると思います。この2点、室内の安全安心な遊び場と、学校と児童クラブの共有、今後の在り方について進めていただければありがたいなと思いますけれども、よろしいでしょうか。
関市長	今お話に出たように、特に熊の問題は通学にも大変悪い影響がございます。ただ、鹿角市の場合は、熊対策として、熊鈴を全児童生徒に配付しておりますし、スクールバスという形で熊に遭遇する機会がないようにしています。あと、これは市民からのお力添えですが、熊対策として5千万円の寄付をいただいております。その中で、集落内の熊が好むような栗や柿の木は伐採していくということで、予算はほぼ執行されてきているところです。あと、これは直接教育委員会には関係ないのですが、小枝指に児玉高慶先生という大変立派な方がいらっしゃるのですが、この児玉高慶先生は日本一の剣道家で、児玉道場を含めて鹿角の剣道をメッカにしようと大会を開催し、会場は大館市でしたが、一昨年、東北管内から600人の剣士が集まって、昨年は約千人、今年は1千300人くらい集まったということで、本当に頑張っていると思います。 また、鹿角高校は県立高校なので、教育委員会とは密接不可分でもあり直接発言できない部分もあるのですが、今年2月に北林県議会議長に児玉県議を通して高校の県外枠の拡充をお願いしました。これまでは県外から入学する生徒は10%でしたが、20%くらいにできないかお願いして15%に拡大していただきました。昨日ちょうど県議と議長とお会いしてお礼をしたのですが、それによって県外から鹿角高校を希望する方がかなり増えてきたということがございます。ただ、それも来るだけでは鹿角市としては難しいので、政策企画課で頑張ってくれているのですが、県外から来る方の下宿の確保ということで事業を進めております。希望者は17人いたと聞いておりますが、そういう環境も拡充しながら市内に若い方が来れるようにしていけば、鹿角市にも残っていただけるかなと思っています。鹿角市に残っていただけるかどうかは、産業部の方で高校生に対する支援を商工会と一緒にやっております、今年もかなり定着する率が増えております。また、教育長が去年、当時の花輪高校校長と協議した中では、意外と下宿の問題がネックとなっていて、そこが一番のポイントだったということでしたし、意外と気が付かない点などがありますので、やはりこの会議でもご提案をいただければと思います。他にございますか。安倍委員。
安倍教育委員	大変難しい問題で何をどう話したらいいかわからない部分もあるのですが、一つはヤングケアラーの問題ですが、家族の中にケアしなければならない人がいると。きょうだいがいるのは昔からあったことで大した問題ではないと思うのですが、いることによってかえって楽しいと思えて、それが将来の自分の子育てにつながっていくということもあるので、もっとあってもいいのかなと思います。ただやはり、父親とかもっと上の年代をみるということになれば、子どもにはかなり負担になるので、そこには支援が必要になるのではないかと思います、いろいろなケースがあると思うので調査しながら、教育の中でも子育ては楽しいものだとということをもっと伝えていけばいい

	のではないかと思います。やはり全体の問題なのですが、ここ鹿角に残る、あるいは出て行っても戻ってくる、鹿角はいいところだと認識していることがそういう状態になるのだと思いますし、小さい頃から必要なのではないかと思います。昔からの民俗芸能や行事もありますが、そういうものが楽しいのだと心の中に残っていれば戻って来られると思いますし、他市へ行ってもそこから支援してくれるつながりができると思いますので、これからももっと進めていけばいいのかなと思います。あとは、こういうことを言っているのかわかりませんが、日本という国は、元々子孫繁栄することで国が栄えるのだということを言われてきたと思います。ところが、何でも自由だ、結婚しなくてもいいんだという風潮が出てきたところから、独身のままでいいんだということになってくるとどうしても子どもが増えない、また、結婚しても子どもはいなくてもいいんだという考えの人もかなりおられるような感じもします。ですが、結婚しなければこの世の中は萎んでしまうということを教育でもあってもいいのかなと思います。それが基本で社会が成り立っているということを理解しなければこの社会がなくなってしまうということを、もっと強くいってもいいのかなと思います。
関市長	郷里や郷土芸能について非常に重要なお話どうもありがとうございました。実は、今回種苗交換会があって、東京都葛飾区で開催された寅さんサミットには出席できなかったのですが、昨年まで2年ほど出席しました。そこで花輪ばやしと花輪の町踊りが行われますが、鹿角出身の方が大変大勢いらっしゃって花輪ばやしと町踊りをみて自分の故郷を実感されるという方が大変多くいらっしゃいました。また、今委員がおっしゃったとおり、東京に住んでいる方でもお祭りなどの時には戻っていらっしゃるということがありまして、地域を支えているのは我々だけではなく、外に出た方も故郷を大事にしていらっしゃるので、そういう方々のお力も得ながら、市内のいろいろなイベントまたは伝統が守られているのだと思っております。また、教育の内容については、文部科学省の方向性と密接に関わっておりまして、この話については明後日また国会議員の方もいらっしゃいますので、いろいろ話をお聞きしたいなと思っております。
阿部教育長	ヤングケアラーの話についてですが、今回、担当課の方からアンケート実施の計画について、教育委員会としても校長先生方のご意見も伺いながら、どのようなアンケートにすればよいかということを検討させていただきました。それで、ご指摘のように、ヤングケアラーを見つけ出すことが、例えばいじめの発見だとか、そういう悪いことを発見するということになる、今安倍委員がおっしゃったように、本来の家庭の人間的なつながりみたいなものも変な形になってしまうので、そうではなくて、具体的にどのようなことが上がってくるか、答えやすい形を考えていただきました。おっしゃるように、普通の関係でお世話していても、アンケートではそのことで負担を感じているか感じていないかを聞いていますので、そこで実態はある程度把握できていました。あと、学校の先生たちが知ることによって、子どもたちを注意深く見ることができるので、困っている人の支援にもつながっていくと思います。決してヤングケアラー自体が悪いことではないのだというイメージを持っていただくことには配慮していただきました。結果にあるように、注意深く見守った方がよいというケースが数件ありましたので、そこは担当課と学校とできめ細かく対応できればと思っております。あと、郷土芸能についてでございますが、教育委員会としましては郷土芸能の保存、継承について支援しているわけですが、今委員がおっしゃったように、伝統芸能を大事だから残すという観点も一つですが、楽しさを伝えるという観点もいただきました。お祭りをやって楽しかったという人の方が帰ってくる率がある程度高かったりしますので、そういった楽

	しさを伝えることによって、将来帰ってくる子どもが増えるかも知れないよという視点で、教育委員会としても、関係団体と協議しながら支援していった、郷土芸能の関係団体の方々にも、伝統だから絶対に守らなければならないのだという使命感だけではなくて、楽しさを伝えることによって将来ここへの回帰が継続していくかも知れないというプラスのイメージを持っていただけるような話し合いを持てればということ、安倍委員のお話を聞いてヒントをいただきました。ありがとうございました。
関市長	あと、教育委員会ではスキー大会を開催していますが、種苗交換会も選挙もそうでしたが、市職員が実行部隊として相当出てくれています。特に、2月のインカレの時は雪が少ないということで、市長部局からもたくさんの職員が花輪スキー場で雪かきをしたり、市民ボランティアの方が雪かきをしてコースを整備したり、もう一つは、自衛隊が32人いらっしやって一睡もしないで一昼夜整備をしたことがあります。来年2月には国民スポーツ大会スキー競技会がありますけれども、市役所職員とボランティアの市民、大会役員の皆さん、それから近隣市町村の応援部隊など多くの方々が動いておりますけれども、私としては常に総合的に取り組んでいかないと難しいなと思っていますが、取り組むとしても情報がないとわからないことがたくさんありますので、皆さんの迷惑にならないようにしていくには、やはりこの会議でご提言等あれば検討して積極的に取り入れていくことが大事なのかなと思います。また、スキーに関しては少子化の問題で競技選手がいない、また、役員が高齢化していて維持するのが大変難しいです。実はこれから青森県庁に行ってくるのですが、青森県庁でも今の話は必ず出ますので、その点をご理解いただきたいと思います。 他にございましたら、和田委員の方から、どうぞ。
和田教育委員	まず、子どもに向けての施策なのですが、基本目標が4つ挙げられておりますが、私が考えるところだと、現在育っているところに対しての施策が必要だというのはあるのですが、足りていないのは、やはり、今日、鹿角市総合教育会議ということで、市と教育委員会とで開催しているのですが、教育委員会となりますとどうしても高校というところに手を付けられないというところがありますが、鹿角市のことを考えると、高校の3年間でどうするかということが非常に大事だと私は考えております。小中学校で手厚く教育をしているのですが、どうしても高校3年間でその培ったものが薄れている気がしてならないというのが私の実感です。高校がダメな教育をしているというわけではないのですが、高校になると卒業した後の19歳から社会に出るための準備、そちらの方で忙しくなってしまうと、どちらかというと今まで培った地域への思いですとか、将来こういう仕事をしたいよねということが生かされないまま現実に追い立てられるように高校を卒業して就職なり大学進学なり専門学校進学なりしているのかなというのを、私もたくさんの子どもたちを今まで見てきましたので、そのように感じております。これを何とかしないとせっかく小中学校で培ったものが先につながっていかないと、私ずっと感じておりまして、市というところに対応していただくのであれば、教育委員会でカバーできない部分を面倒見ていただかないと最終的に市のためにならないのではないかと思います。あと、やはり実際に高校を卒業して大学に行く場合、残念ながら鹿角市には大学はございませんので、鹿角の地を離れるという選択をしなければいけないので、わからないところに突入していくという側面が非常に強いです。そうすると、私が触れてきた人たちを見ると、親が大学を卒業した経験がある人であれば、大体大学ってこんな感じだよねとある程度理解していて、家庭内で筋道が見えているのですが、ずっと鹿角で育って鹿角で仕事をしてきた親御さんたちは、地元で大学がないので、大

	学ってどんなところなんだろうと、オープンキャンパスも充実はしていますが、ただ単発に大学を見に行っても、大学は楽しそうに見えますので、そういうところでの知識しかないで、イマイチ大学とか大学の後に対しての知識が圧倒的に足りていないというのは、鹿角市だけでなく県内でも秋田市以外であればみんな抱えている問題だと思います。そういった情報を提供する場はどこなのかと考えたときに、ちょっと小中学校ではできないと思います。しかし、高校で情報提供しても私個人的にはもう遅いと思っています。小中学校の時から世の中ってこういうことなんだよと見せてあげないと。そしてその上で、いずれ鹿角に戻ってくる人材を同時に育成していくことも考えなければ地域というものとはなかなか残っていかないと思います。秋田市にある国際教養大学という優秀な人材を育てる大学がありますが、開学当初は秋田県に1ミリも貢献しない大学と言われておりました。みんな外に出て行く、あれだけ優秀な人を秋田で育てても、全員外に出て行って秋田には誰も残らないという大学でしたが、今少しずつ秋田の魅力を感じて、秋田に残って活躍する国際教養大学の生徒が増えてきています。これは、大学の努力の結果だと思いますので、同じような努力を各市町村でしていかなければ、地方というのはどんどんどんどん先細りする。人が減っていくのはしょうがないと思いますが、情報というものを提供する場というものがなければ、非常に厳しくなっていくのかなと思います。支援にはどういう支援があるのか、物理的な支援もあると思いますが、情報を早い段階で提供していくということも支援の一つかなと思います。なかなかそういう情報を持っている人は多いようで少ないのですが、私はそういう説明をある程度はできますので、必要であれば使っていただければと思います。現在と将来に向けての2本立てということを意識していただければと思っています。以上です。
関市長	どうもありがとうございます。今の和田委員のお話を聞いて、先月あるところで議論になったのが、秋田県の小中学校の教育レベルは全国トップクラスだと。しかし、大学に入学する率が非常に少ないと。それから、日本一の教育県である秋田県がどうして大学進学率や内容等で全国で相当の下位にいるというのであれば、3年間の教育は何なんだというような批判をされる方がいらっちゃって、私もその時初めて、確かに、全国テストも含めて、秋田県の教育は日本一だと報道等でもされているのですが、やはりその辺のギャップは改善する大きな点なのかなと思っています。特に、高校については、先ほどから何回もお話しているとおり教育委員会では関われない。ただ、今回は統合校の関係がありまして、その際に、教育長には花輪高校にも行っていただいたし、下宿対策も各課で進めており、県外枠を拡大するということでも、初めて八幡平市の中学校の校長先生とも関係ができています。あとは、県の高校教育課長の久慈さんという方が鹿角の方なので、私自身も出向いて直接お話する機会もありますので、この高校との関係をきちんと構築していければと思っています。もともと、花輪高校も十和田高校も小坂高校も各市町が大変力を入れて誘致してきたものでありまして、昭和4年に県立高校にするときには当時の町長が、十和田高校についても昭和18年当時の毛馬内町、大湯町が、小坂町も同じで相当頑張って誘致したものでありまして、大変町と高校は近い関係にあると聞いておりました。それから、通学バスについては、小坂から花輪駅を経由して鹿角高校まで通学バスを出しています。当初は、3、4人しか乗らないのではないかと、補助金50万を出すのも難しいのかなと思っていたのですが、現時点で小坂からの通学バスは満員です。さらにもう1台出すという方向になってきています。鹿角市として鹿角高校との関わりはまだ少ないのですが、やはり積極的に関わって行って、地域の高校という点で課題を解決していければと思っています。あと、大学のオープンキャンパス

	の件ですが、政策企画課で実施している武蔵野大学に来ていただいています。それから、大正大学と徳島大学の3大学が、今来れるようになっていきます。最終的に総合計画に載せる方向で検討していますが、サテライトという形でこちらに学校を誘致できればと思っていますところでもあります。ただ、自分の公約の中で話していますが、鹿角の先人顕彰館がやっているレクとか講義等はほぼ大学の講義に匹敵する形ですし、また各工業関係の学校等の内容を見ると、ITの関係はかなりレベルが高いので、そういうところにも市として応援しながら、高校とのつながりができればと思います。例えば、今回鹿角高校の工業研修棟は約10億円でできています。3Dプリンターだとかいろんなコンピューターとかがありますが、現時点での工業製品を作るレベルとしてはトップクラスのものを入れていますので、職業教育で連携させていただければ、そこ自体が大学に匹敵するのではないかなと思います。職業関係でいきますと、工業関係の学科の教科書も拝見しておりますが、やはり大学1年の人たちが勉強している教科書よりは1ポイント上です。工業科の教科書のレベルが非常に高いということを我々も自覚して、そういうつながりが生まれるかなと思っています。
阿部教育長	私の方からよろしいでしょうか。和田委員のお話で、中学校でも職場体験をしているわけですが、今の最新の大学の情報などはおっしゃるとおり、中学生はなかなか得にくい状況ではあると思います。そういったところを高校の先生たちと協力しながら、子どもたちに将来の夢のイメージを持ってもらうことも大切な観点だと思いますので、参考にさせていただきたいと思います。あとは、市教委として、あるいは鹿角市として、高校にどういった支援があるかということについては、おっしゃるとおり県立高校ですのいろいろなことに関与していくわけにはいかないのですが、例えば、鹿角高校で行っているふるさと教育に関する部分に、小中学校で行っているふるさと教育支援みたいなことの延長でお手伝いできるということも伝えてあります。市内のいろいろな優秀な企業さんの情報についても、中学校でも高校でも早い段階で子どもたちに知っていただくことで、大学を卒業してUターン等でも、鹿角市の企業が選択肢に入ってもらえるように、できるだけ早い段階で情報支援をできるように努めておりますので、引き続きそれをできるだけ充実させていきたいと考えております。ありがとうございました。
関市長	吉田委員の方から、どうぞ。
吉田教育委員	はい。ニーズ調査のアンケートの中で、子育てにおける家庭の役割というところで、親御さんにとってどの項目も高い意識をもって子育てをされているということがわかりました。必要なことは、子どもの健康だったり、安心して眠れる場所を親として頑張っているということとともに、支援する側の公的機関の役割とは何だろうなと考えたときに、やはり今現在鹿角市で生きている子どもたちを大切にすることや、勿論、人口減少を止めたいという思いもありますが、急激な増加はおそらく見込めないだろうなという思いもありますので、時代に合った地域づくりをしていかなければいけないというふうに思います。このままでいくと、7年後、10年後に、鹿角市内の小学生が400人台になるという試算であれば、私事ですが、10年前、私の長男が子ども会に入っていたときは、100人いましたが、現在私の3番目の娘の時代は30人になって子ども会は廃止になりました。そういった中で、勿論コミュニティも大切なのですが、鹿角を一つの地域と考えて子育てしていくときに、学校とかPTA、部活動の仕組みについて、昔とは違うんだというところを私たち親も勿論意識を変えていかなければならないのではないかと思います。やはり、親の中では、このままでいくと自分の学校がなくなる、統合されるよねとか複式学級が当たり前になるのではないかなという声も聞かれますけれど

	も、統合ありきで進めるのではなくて、やはり地域から学校がなくなるということはそのすごい損失だと思います。学校の先生方も頑張ってくださいしていますし、児童センターも素晴らしいものがあるにもかかわらず、人手不足で疲弊しているのではないかなと思います。そういったところに人づくりを進めて、子どもを地域で支えていくというところを、鹿角市だけでやっていくには限りがあるかも知れませんが、その限りがある中でもやっていかなければならないと思います。子どもを持つということが当たり前だと思っているところもありましたが、何人持てばいいという問題でもなく、例えば、第1子以降の子どもを持つ女性の就業率が上昇すればいいなという思いもありますし、私は今ほぼ子育てを終えた状態にあります。鹿角市は、保育園だったり児童手当や子育て支援センターの拡充だったり、子育てに対する支援が素晴らしいと思いますので、先ほど申し上げましたように、学校や児童センターの人づくりに力を入れていただきたいなと思います。一つ伺いたいのですが、今回ヤングケアラーのアンケートが行われましたが、その結果については、教育委員会や学校、関係各所において、自分たちが思っていたのと同じ結果が得られたのか、それとも大差があったのかを教えてください。
関市長	今、非常に重要な提案がありましたが、対策については、非常に多くの部署にまたがっておりますが、ヤングケアラーについては健康福祉部の方で答えていただければと思います。
すこやか子育て課長	それでは、すこやか子育て課からヤングケアラーのアンケート結果についてお伝えしますけれども、学校の方で心配していたお子さんがやはりアンケートの結果からも子どもさん自身がお世話をしているという回答をしたお子さんがおまして、学校との共通認識のもとで、状況を把握することに努めております。あと、今緊急性の高いところから調査に入っておりますが、全体の共有について各学校とは実はまだできていなくて、これから、全ての「お世話をしている家族がいる」といった世帯について共有しながら、学校の情報とこちらの情報を突合しながら、支援が必要な家庭については、これからつなげていくということで進めております。
関市長	はい、どうぞ。
吉田教育委員	ありがとうございました。今後の対応について、ヤングケアラーの理解や気づきにつながる普及活動をしていくということが、私は大きいと思います。例えば、夜間、年の離れた兄弟をみるとか、自分しかいないので自分がやらなければいけないということが、お手伝いの範囲とケアしているという範囲の線引きは大変難しいと思いますけれども、そのことによって例えば就学を諦めなければいけないとか就職が限られる場合があるとか、そういうことも大きいと思います。となると、子どもの意識ですが、自分がヤングケアラーであるかも知れない、でもこれは違うかも知れないということを口に出す場があるとか、学校の先生なのかも知れませんが児童センターに通っていれば指導員の方かも知れませんが、そういった子どもたちへの普及も勿論大事です。周りにいる子どもたちに接する方の意識を変えていくことも大切なのではないかと思います。よろしくお願いします。
関市長	今、吉田委員から大事な提案がありました。この総合教育会議で感じたのは、非常に学校の先生の業務が多いんですね。実は私、民生委員をやっていましたが、学校の先生がどういう業務をしているのか、いろんな評価だとかレポートだとか実務について、民生委員の会議の時に講演してくれた先生がいましたが、先生たちが子どもたちに教えるためにこれだけ細かく書類を作らなければいけないのかと思って、これでは先生たちの手が足りなくなっているのではないかと思います。民生委員の方も書く書類が多

	いものですから、学校の先生みたいにならないようにしてほしいと生意気なことを言ったのですが、本当に大変だなと思った印象があります。そういう点で、我々ももう少し先生方の負担が減るような方向で、何らかの形で応援するということが、実は子どもを助けることにつながってくるのかなと思います。ですから、サポートする人の一人は、やはり学校の先生であることは間違いないので、負担を減らしながらそういうところを補える形にしていければと思います。
阿部教育長	私の方から一つ、活用についてですけれども、今回調査していただいたので、我々学校に関係ある者としても勉強になったと思います。言葉としてはみんな知っているのですけれども、おっしゃるように、どこまでがケアでどこまでが家族関係で当たり前のことなのかということも含めて、こういう調査を通して子どもたちも親御さんも私たちも勉強になったということで、これを協力して行うことで周知が高まってくると、本当に困っているお子さんへの支援につながっていくものと考えておりますので、そういった意味で大変良い機会を与えていただきました。
関市長	他にご意見ございますでしょうか。 他にないようですので、「こども施策について」は、皆様のご意見を踏まえながら、重点的に講ずべき施策として進めさせていただきます。 次に、次第の５．その他であります。委員の皆様、若しくは事務局から何かございましたらご発言願います。 なければ、これで会議を閉じたいと思いますが、本日協議が整いました重点施策につきましては、市と教育委員会が一丸となって、さらなる充実を図ってまいりたいと考えておりますので、教育委員の皆様には、引き続き、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。 以上を持ちまして、鹿角市総合教育会議を閉会いたします。 本日はどうもありがとうございました。

(午前１０時５８分閉会宣言)